

「無伴奏は自由の象徴」

バイオリンの渡辺玲子が、無伴奏の世界で新境地をひらいている。新譜「SOLO」を発表し、19日には東京・赤坂のサントリーホールで無伴奏作品を集めたリサイタルに挑む。「人生の伴侶」であるバッハには、とりわけ「弾くたびに自分の変化に気付かせられている」という。

バイオリン・渡辺玲子が新境地

剣士を思わせる潔い弓使い。新譜でも、芯のある音で、哲学的なバッハから技巧的なエルンストまで、迷いなく駆け抜けている。

「無伴奏は自由の象徴」と語る。自らのテンポや色彩感に素直でいられるからだ。その無伴奏を軸に試行錯誤を重ねたことで、「若い頃よりも安定したテクニックを得た」という。

「練習すればするほどうまくなる、森稜率いる「Noisism(ノイズム)」



昨秋、新実徳英バイオリン作品展で、集中力みながら演奏をさせた渡辺玲子。竹原伸治氏撮影

テンポや色彩感が自在に

と共演。テンポもニュアンスもその都度変わるスリリングな「一期一会」を、ダンサーたちと満喫した。

若い頃、パガニーニ国際コンクールなどで優勝を重ね、注目を浴びたが、「あの頃は、どこかスポーツのような感覚で弾いていた」と振り返る。

20代の頃の米国暮らしで、音楽家は地域社会に根差した存在でなければならぬ、と思い知る。コンクールで勝っても、米国ではさほど騒がれない。脚光にも慣れない軸を培った。

現在、秋田の国際教養大で教鞭をとる。ビバルディの「四季」の大本になった詩を読ませるなど、芸術の世界に潜ってゆくためのヒントを一般の学生たちに教えている。「音楽教育は人間教育。大作曲が持てる限りの能力と思いを注ぎ込んだ作品だからこそ、精神の支柱をしっかり伝えたい。芸術は単なる娯楽ではないのだ」と。

11月には秋田で、中高生など対象のレクチャーコンサートも開く。「自分が何を感じ、どう思ったか。その根拠を自分のなかで突き詰めてはじめて、進むべき道が見えてくる。音楽と関わることで自分が変わり、人生が広がることもある。その入り口へと、到達できるよう導いてあげたい」

リサイタルは午後7時から。問い合わせは、アマテイ(03・3560・3010)へ。(吉田純子)